



# 能古博物館だより



木造和船「新生虎幸丸」の進水式(2008年8月29日) 撮影 佐藤 郁男

## 「海の博物館」に衣替え 人心一新、新たなスタート

理事長兼館長 原 寛

「発信する博物館めざせ」——。これは同じ博多湾にある「海の中道海洋生態科学館」(マリンワールド海の中道)の高田浩二館長が朝日新聞に寄稿したエッセーの見出しです。同館は株式会社で、西鉄や九電が資本参加して運営しています。このような一見恵まれた施設ですら経営に必死になる時代。情報を発信して知名度を上げ、来館者増につなげようと知恵を絞っています。

また対岸の百道浜を望む景観を生かすため、思い切った改装工事を行いました。幸いにも大型企画5本が日本財団の助成事業に選ばれました。年明けの3月まで逐次実施して参ります。国内の小さな民間博物館はおしなべて苦戦しています。著名な一部の館を除くと入館者は年々減少の傾向にあります。当館とて例外ではありません。20年の長きにわたり長期凋落傾向が続き、近年はひとりの入館者もない日があります。

目を国内各地に転じてても、付属レストランのケーキが旨いとか、ショップのグッズが豊富だとかを含めて、集客装置にあらん限りの努力を傾け、生き残りを図っています。旭川市の旭山動物園の成功はその最たるものでしょう。根底にあるのは「楽しく学べるかどうか」ではないでしょうか。

ともすると惰性に流れた過去を払拭し、人心を一新して、再出発と取り組む覚悟です。今後とも変わらぬご支援をお願いいたします。

能古博物館は開館20年を迎え、「海の博物館」にギアチェンジしました。亀門学研究所の旗印を高く掲げながら、江戸時代の能古島が「筑前五ヶ浦廻船」の繁栄の舞台であ

約10年間に在職した菊地幸子事務局長は「家庭の事情」を理由に4月30日付で退職しました。5月29日開催の定例理事会で原館長が報告し了承されました。後任は当分置かず、原館長をトップに理事らの分掌で運営に当たります。



原 寛  
博多湾の歴史に市民の視線を向けてみました。

### 新体制で運営

- ▽総括責任者〓理事長兼館長・原寛
- ▽20年事業運営担当〓常務理事・西牟田耕治
- ▽総務担当〓理事・黒田康介
- ▽経理担当〓理事・毛戸彰
- ▽天神分室担当〓理事・柏木重人
- ▽企画広報担当〓柏木竜一



本館ロビーに

櫓漕ぎの木造和船

能古島で建造

8月29日午前11時過ぎ、全長4メートルの木造和船が能古島の海に浮んだ。開館20年を迎えた(財)亀陽文庫・能古博物館が、日本財団の助成(総工費の50%)を受け、3ヶ月がかりで製作した記念事業だ。さつそく本館ロビーに展示され、特別企画展の「目玉」になっている。

博多湾内で本格的な木造の櫓(ろ)漕ぎ和船が建造されたのは数十年ぶりといわれ、これがおそらく最後の機会ではないかとみられている。

作ったのは福岡市城南区茶山に住む船大工東野秋夫さん。75歳。亡兄と共に市内で長く船大工をやっていたが、近年は仕事が途絶えていた。

進水式には福岡市の荒瀬泰子早良区長ら島外の来賓をはじめ地元各界代表、能古校区子ども会育成会(中里秀一会長)の小中学生、能古保育園(塩見芳枝園長)の園児ら約80人が参列して、能古漁港そばの海岸で賑やかに行われた。東野さんは残念ながらも体調を崩して欠席した(後日回復)。

博物館の原寛・理事長兼館長が「日本財団の助成のお陰で進水式を迎えることができた。和船の建造技術を伝え、子どもたちに櫓漕ぎを体験させたい」と挨拶。島民の投票をもとに決めた船名「新生虎幸丸」が披露された。

満潮時に汲んだ海水を使った「汐払い」の儀式、原館長による「御神入れ」など伝統の行事の後、紅白の餅まきを行い、人々の拍手のうちに無事進水した。



東野秋夫さん(額のエンピックがトレードマーク)

朝方の雨天もおさまり、折り良く風も弱くなった。中学生3人を乗せた新生虎幸丸は、地元の漁師丸尾淳さん(54歳)の櫓でゆらゆらと前進した。

「虎幸丸」とは

「能古島が最も輝いた時代」高田茂広著「筑前五ヶ浦廻船」から「といわれる筑前五ヶ浦廻船の歴史に名を残す千七百石の大型帆船。江戸時代末期に活躍した。当時、開国を迫る米國艦隊の圧力が強まり、幕府は国内の千石船級の大型船の中から能古島の「虎幸丸」、「虎吉丸」など6隻を選抜して、物資輸送に当たらせた。このときの功績で幕府は両船に浦賀水道の優先航行権を与えた。地元能古中学の校歌は「虎幸丸」の名を歌詞に挿入して、先祖の偉業を称えている。いわば島民の誇りの象徴である。



・本館ロビー・  
建造公開された木造和船「新生虎幸丸」  
全長4m、最大幅130cm

助成 日本財団 The Nippon Foundation



紅白の餅まきに歓声が上がった



試乗する地元の子どもたち



「汐払い」の儀式を行う原館長



東野秋夫さんの代理、子息の貢さんに花束が贈られた



拍手を浴びながら地元の漁師丸尾淳さん(54歳)が櫓を漕いだ





起工式は神式で行われた

建造には約3ヶ月間を要した。起工式は6月4日、作業場として福岡市から借り受けた旧能古公民館で行われた。地元自治会、漁協、農協、公民館、郵便局の代表者、白鬚神社の氏子総代らが参列。近くの能古保育園の園児18人が「能古保育園の歌」と「海の歌」を歌って東野さんを激励した。東野さんは古式に従って工具を振り、「ちょうな初め」の儀式を行った。



連日35度以上の猛暑が続いた

今夏の異常な猛暑のなか、東野さんは汗まみれになって建造に取り組んだ。簡単な設計図は描いたものの、経験を生かした設計図抜きの作業が随所に見られた。工程の後半は漁協の作業小屋に移して行われた。かつて島には木造漁船を建造する小型造船所が数カ所あった。島の「公民館だより」で和船建造を知った古老たちは、思い思いに集っては東野さんを励ました。材料のスギ、ヒノキ、カシ材は全て国内産。東野さんも驚く高品質だった。「こりや、よか材料バイ」。東野さんは自慢げに話した。



踊りながら歌う園児たち



古式に従った東野秋夫さんの「ちょうな初め」



島の人たちが手伝った



舳先のカーブを削る



国産の良材を特別に注文した



黒光りする工具類



一心不乱.....



特別企画展開催中!

テーマは『博多湾の歴史』

新たに「海の博物館」に変身した能古博物館では、開館20年記念特別企画展「能古島発「蒙古襲来からサザエさんまで」を開催中です。

- 主な内容
- ① 蒙古襲来
  - ② 金印鑑定
  - ③ 筑前五ヶ浦廻船
  - ④ 能古島を中心にした博多湾地図
  - ⑤ サザエさん誕生
  - ⑥ 海外引き揚げの記憶
  - ⑦ 史上初、ヨットで太平洋単独往復



愛称は「海が見える丘博物館」  
改修工事に伴い、博多湾物語をイメージした「海の部屋」が誕生しました。目の前の海を眺めながら椅子に座っておしゃべりする空間です。ご利用下さい。

- ◆日本財団の助成で大型企画5本を展開◆
- (一) 小冊子(A5版カラー22P)  
・能古島発「博多湾物語」の発行
  - (二) 全長4メートルの木造和船の建造、展示
  - (三) 外洋ヨットによる五ヶ浦廻船クルーズの実施
  - (四) 大型ジオラマ「能古島を中心にした博多湾」の製作、展示
  - (五) 樋口恵子講演会の開催(早良区と共催)



日本財団の助成金を受けて五つの事業に取り組んでいます。すでに木造和船の建造を終えました。小冊子は初版3千部に続き改訂版7千部を発行しました。10月12日に五ヶ浦廻船クルージングを実施しました。12月末に大型ジオラマの完成が見込まれ、年を越して3月14日には社会評論家の樋口恵子さんを招いて講演会「サザエさんからいじわるばあさんへ」～長寿社会と女性たち～(福岡市早良区・もちパレス)を開きます。



旧西鉄ヨット部の名艇「シーホース」級

西日本鉄道ヨット部の発注で、1961年(昭和36)ごろ岡本造船所(神奈川県)で完成した「シーホース」級の小型艇。ニス塗りの上品な木造艇はヨットマンの垂涎の的だった。工費は約30万円(当時の大学卒初任給の平均は約1万円)。  
博多湾に初めてお目見えした「シーホース」として普及を期待されたが、結局この1艇だけ散じて今はない。

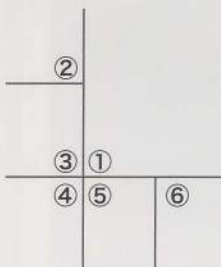


開館20年記念特別企画展  
能古島発「博多湾物語」  
～蒙古襲来からサザエさんまで～



昭和時代にもスポット

- サザエさん誕生! ① ② これまで西日本新聞社の資料部門に眠っていた貴重な写真が今回の特別展開催を機会に公開されました。1946年(昭和21)ごろの長谷川町子さんがお馴染みの「サザエさん」を描いているところ。若き日の長谷川さんの生き生きとした表情に、マンガの主人公サザエさんを重ね合わせたくなります。
- ヨットの牛島竜介さん ③ 太平洋単独往復の航海日誌を初公開しました。(牛島竜介さん提供) ④ 使用艇「サナトス号」の模型を製作展示しました。
- 国内最大の引揚げ港・博多 ⑤ 来館者の多くは「引揚げ」の史実に驚いています。⑥ 引揚げ漫画家の会の協力で「海外引揚げ」を分かりやすく展示しました。





博多湾の歴史を学ぶ  
**五ヶ浦廻船クルーズ**  
 好天に恵まれ小戸ヨットハーバーで開催 ・10月12日



①江戸時代に廻船でにぎわった海域をクルーズ②終わって記念撮影。「また来年お会いしましょう」③西日本新聞の記者が同乗取材④北京五輪49er級日本代表の石橋選手(左端)がセーリングの魅力語った⑤クルーの素早いウインチワークに驚嘆⑥親子ともヨットは初体験。最初は少し緊張していた。



サザエさん誕生



海外引き揚げの記憶



史上初、ヨットで太平洋単独往復

漫画家の森田拳次さんが特別企画展のために描(か)き下ろしたイラスト6点を「海の部屋」に展示しました。森田調の明るいタッチで描いた「博多湾物語」。子どもたちに地元の歴史をやさしく伝え、博多湾に親しんでもらうのが狙いです。

森田さんは1939年(昭和14)東京生まれ。ギャグ漫画「丸出だめ夫」などで知られます。赤塚不二夫さん、ちばてつやさんと「中国引揚げ漫画家のお宝」を結成。2002年(平成14)同じ体験を持つ漫画家13人の作品を集め、大型画集『中国から』の引揚げ少年たちの記憶』を出版しました。本館ではこのうち11点を別館2階の「海外引揚げコーナー」に展示しています。



森田拳次さんの描き下ろし6点を展示



蒙古襲来



金印鑑定



筑前五ヶ浦廻船



# 金印のあれこれ話(その二)

岡本 顕実

志賀島から、あの金印(『漢委奴国王』印かんわのこくおう印いん 国宝)が見つかって今年で224年になる。九九にならって「ニ、ニン、ガ、シ」と語呂あわせが良いが、肝心の金印発見の話となると、とたんに歯切れが悪くなる。第一、発見の状況がいまいである。金印そのものに謎がある。なにしろ、日本にまだ文字がなかった2000年前の絶品である。いったい日本の誰が中国の皇帝から賜ったのか? 奴国王が定説だが:。その解釈いかんでは日本の古代史の実像が左右される。金印のニセモノ説も根強い。例の邪馬台国論争と肩を並べる。『国民的大論争』なのだ。最近の金印事情もまじえて見てみよう。

## おお、ミステリーノ金印秘話

最近、信じられないような出来事が金印を巡って起きた。そのことを知る人は少ない。最近“と書いたが平成元年(1989)のことである。20年前のことだが、金印2000年の歴史からみると、モノの数ではない。同年3月から半年間、福岡市のシーサイドももちでアジア太平洋博覧会が開催され、期間中の入場者が海外からも含む823万人という大イベントであった。

この博覧会の目玉は、やはり志賀島の金印であった。「古代から2000年に及ぶ海外



上が志賀島の金印、下が「廣陵王璽」印。兄弟印である。平成元年、福岡市で2000年ぶりの再会を果たした。

交流の証し」というわけだが、中国からの特別出展がひととき花を添えてくれた。それは1981年、江蘇省の甘泉かんぜん二号墳で発見された「廣陵王璽」印(金印) Ⅱ写真Ⅱで、中国の文献によると西暦58年、廣陵王に下賜されたものであり、この年は志賀島の金印が奴国王に下賜された翌年に当たる。ということは両者は兄弟印と考えられる。ともに洛陽の工房で作られたはずだ。

両者をつくづく見比べてみると、規格、字体(印面)、デザインと何から何までそっくりであった。実に「兄弟」の2000年ぶりの再会なのであった。このこと自体、ひとつの奇跡なのだが、それを上回るミステリーな出来事がある晩、起きた。

博覧会のオープンを目前にして名古屋市博物館の学芸員、K氏が福岡市を訪れた。同博物館では福岡の博覧会が終わった後、南京博物院展を開催するため、その準備に「廣陵

ドカメラで1枚撮った。その時である。両者をつなぐリンク状の発光現象が起こった。光は緑色を帯びて、オーロラのような印象だったという。カメラマンはあわてて「ポラの調子が悪いのか」と、2枚目を撮ったが発光現象は2度と起きなかった。

K氏は驚いて早速、福岡市教育委員会の塩屋勝利氏(当時)に報告。塩屋氏も驚いてK氏ともどもタクシーを飛ばして九州大学の恩師、岡崎敬教授(故人)の自宅に向い、報告した。岡崎教授は金印研究に心血を注いで来た学者だけに、その話を聞いて病床で涙したという。

さて、こんな不思議なことが現実起きるのだろうか。塩屋氏はいう。「うーん、私は現場にいなかったが、件のポラ写真を見て発光現象を確認した」。氏の解説が面白い。中国の古代思想に四獣が四方位を守る、というのが有名になったが、北を玄武、南を朱雀、東を青

王璽」印の撮影に来たのだった。プロのカメラマンが志賀島の金印と、「廣陵王璽」印を並べて撮るため、両者を斜交いに近付けて置いた。その幅1センチ。ポロライ





玄武(げんぶ)。中国の五行思想による水神で、蛇と亀が合体している。8世紀、薬師寺(国宝)。

「たしかに私の手もとにはその写真があります。個人的に見せるのはかまいませんが、一般に公開するとなると、私も行政職の一員ですから、説明のつかない超常現象を私から提供するわけにはいきません」。なるほど、一理ある話である。かくて今回は私にとって、幻の写真“に終わった。しかし、K氏の話からも金印の発光現象が確かめられた。世の中には

「大成功でしたね」と行政関係者。今年は地元漁協、農協、商工会、自治会、学校関係——と幅広い参加があり、港では満開のコスモス園を背景にテントが並び立ち、中ではサザエの壺焼き、サワラ弁当など特産物の販売で賑わった。

そこで今回、筆者はK氏に電話で連絡をとる、その写真を見せてくれるように頼んだ。筆者には1ヶ月後、金印の講演会があり、個人はもちろん、多くの人たちにその写真を紹介したかったのだ。ところがK氏の回答は意外なものであった。

龍、西を白虎が守護する、といわれる。このうち玄武は蛇と亀が、からんで一体をなす「写真」。志賀島の金印のツマミ部分(これを鈕という)は蛇で形どっており、「廣陵王

不思議なことがあるものである。

金印をネタに島おこし

金印が出土した志賀島では今、「島おこし」に金印の話を活かそうと新たな取り組みが始まった。中心になるのは志賀島歴史研究会(折居正勝会長)である。折居会長は永年、地元郵便局に勤めるかたわら志賀島の歴史研究に努め、定年後、活動を本格化。昨年11月、第1回「志賀島歴史シンポジウム」『金印、漢委奴国王の真実に迫る』を開催したところ、参加者が予想を大幅に上回る約400人を超え、主催者側を驚かせた。中でも関東、関西からの参加者が100人を数え、金印の幅広いファンの存在を浮き彫りにした。

今年も10月18日、第2回シンポジウム『金印の島と阿曇族』を開催。「第2回はダメさ」と一部の冷やかな観測をはね返して参加者は約300人を数えた。

講堂。島には100人を超す収容可能な公的施設がない。そこへ終日、長野県のテレビ信州から来た取材スタッフが張りついた。聞けば、来年5月、安曇野市の穂高神社の、20年毎の式年遷宮祭に備える取材だという。実は今回シンポのテーマである海人「阿曇族」は志賀海神社の源流であり、穂高神社の祭神は志賀海神社の系統なのである。

今シンポジウムの報告でも、全国各地に「シカ」、「アズミ」の縁のある地名は実に33カ所に及ぶという。古代史の奥行きはまことに深い。

△筆者略歴▽ おかもと・けんみ 早稲田大学第一文学部卒。1970年(昭和45)毎日新聞社入社(社会部記者)、1984年(昭和59)退社。さわらび社代表として、編集、出版、執筆活動に従事。既刊に郷土歴史シリーズ『志賀島の金印』、『元寇』、『大宰府』など8点がある。福岡市在住。



10月18日、志賀島の歴史シンポジウムでは島あげの歓迎行事。まず、志賀島小の児童による笛や太鼓の演奏に続き、島民による盆踊りの披露。いずれも志賀海神社の神事に関わり、千年の古風を留める。





# 能古博物館協賛会・友の会

平成20年継続・新規加入(10月末現在)

## 法人協賛会員(敬称略・順不同)

- (医)廣徳会 岡部病院
- (医)江頭会 さくら病院
- (医)笠松会 有吉病院
- (医)恵光会 原病院
- (医)原土井病院 なごみの里
- (医)大乗会 福岡リハビリテー
- (医)シニ病院
- 浄土真宗本願寺派浄満寺
- ギャラリー倉(大阪)
- 学校法人 原学園
- (株)ホームケアサービス
- (株)サンコー
- (株)センタービル
- (株)CDS
- (株)福岡メディカルリース
- (株)メディカルアシスト青葉
- (有)トータル・サポート・コー
- ポレーション
- エームサービス(株)
- (株)彩苑
- (有)タカテクノサービス
- (株)豊友技建工業
- 福岡住宅流通サービス(有)
- 西日本シティ銀行土井支店

## 個人協賛会員(敬称略・順不同)

- 永野 豊
- 藤井 鉄夫
- 松本 美津子
- 大石 恭仁子
- 児玉 玲子
- 原 靖子
- 黒田 明子
- 今村 さち
- 西牟田 奈々
- 村崎 文英
- 安藤 啓介
- 江頭 敬二
- 原 千春
- 久保 雅貴
- 戸井 千春
- 寺坂 雅治
- 上野 道雄
- 仁保 喜之
- 翠川 文子
- 石野 恵子
- 増田 康治
- 津村 建次
- 津田 泰夫
- 八木 祐二
- 平 博司
- 原 祐寛
- 本松 利治
- 明石 散人
- 亀井 准輔
- 毛戸 一彰
- 今永 成雄
- 上崎 典雄
- 朔元 則望
- 原 礼望
- 中川 征一
- 山崎 剛一

## 友の会会員(敬称略・順不同)

- 宮崎 正直
- 岡部 九州生
- 立石 あとむ
- 杜 三郎
- 鼻地 三郎
- 平川 良輔
- 藤瀬 三枝子
- 三苦 枝子
- 西山 紀子
- 瀨野 雄代
- 木野 雄代
- 岩本 博秀
- 松熊 友彦
- 衛藤 博史
- 江崎 二郎
- 水田 和夫
- 森口 智子
- 箕原 智子
- 岸原 洋子
- 石橋 善弘
- 小川 道博
- 長尾 道博
- 高根 勲
- 安保 襄史
- 一坊寺 将
- 吉安 蓉子
- 石橋 清助
- 市丸 喜博
- 上田 柳博
- 金子 修一
- 小谷 正毅
- 杉原 正毅
- 永岡 喜代太
- 野崎 逸郎
- 林 九楼
- 前田 敏也
- 三宅 碧子
- 村上 碧子
- 松井 俊規
- 小田 富夫
- 池田 修三
- 吉瀬 宗雄
- 田里 朝男
- 山田 博子
- 古川 映子
- 甲本 達也
- 真理(元)



**協賛会員・友の会員の御案内**

1 協賛会員会費  
個人1口 10,000円(何口でも可)  
法人1口 30,000円(何口でも可)  
友の会会員会費  
1口 3,000円(何口でも可)  
納入方法  
郵便振替017300960970  
財団法人 能古博物館

尚、振込み料は当館にて負担させて頂きます。  
受け付け次第、会員証とコーヒーチケットをお送り致します。  
2 会費有効期限は1年と致します。  
3 入館時に会員証(御同伴1名まで有効)を受付に御提示下さい。御入館は随意で回数制限はなく無料です。  
コーヒーチケットで換えたの香り豊かなコーヒーをサービス致します。

4 「能古博物館だより」を年数回郵送致します。また会員の皆様の御寄稿、御意見は同紙に掲載致します。但し諸事情で掲載を見送る場合がございます。予め御了承下さい。  
5 館が企画する催物の御案内と参加費の割引を致します。  
(財)亀陽文庫 能古博物館  
理事長兼館長 原 寛

## アクセス

- 西鉄バス**
- ・JR博多駅 博多口正面Aのりば 300,301,302番 能古渡船場行:約50分
  - ・天神 三越前1Aのりば 300,301,302番 能古渡船場行:約30分
- 市営地下鉄:「姪浜駅」下車 乗り継ぎ**
- ・西鉄バス姪浜駅 南口 98番 能古渡船場行:約15分
  - ・タクシー:約10分
- 市営渡船(フェリー)**
- ・姪浜-能古島間:約10分
  - 能古島渡船場より博物館まで
  - ・徒歩:5~10分(2ルートあり)
  - ・バス:小中学校前まで約5分 徒歩で約2分
- 問合せ**
- 姪浜旅客待合所 TEL 092-881-8709
  - 能古旅客待合所 TEL 092-881-0900

**開館日** / 毎週金曜・土曜・日曜と祝日  
※団体にて入館の場合は曜日にかかわらずご相談ください  
※年末年始の休館はお問合せください

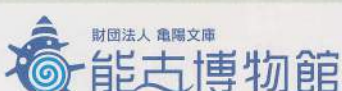
**開館時間** / 9:30~17:00(入館16:30まで)  
冬季(12月~2月末)は10:00~16:00

**入館料** / 大人400円・高校生以下無料

## 能古-姪浜航路時刻表

往の発	能古 発
5 0 15	0 00
6 30	15 45
7 00 30	15 45
8 00 30	15
9 15	00
10 15	00
11 15	00
12 15	00
13 15	00
14 15	00
15 15	00
16 15	00
17 15 45	00 30
18 15 45	00 30
19 45	30
20 30	15 45
21 00	45
22 00	45
23 00	00

◎印は日曜日・2008年10月現在



財団法人 亀陽文庫  
〒819-0012 福岡市西区能古522-2 TEL 092-883-2887 FAX 092-883-2881  
http://nokonoshima-museum.or.jp E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp